

## 論文の内容の要旨

氏名：吉 村 さやか

博士の専攻分野の名称：博士（社会学）

論文題名：

### 髪のない女性たちの「生きづらさ」に関する社会学的考察 ーフィールドワークの経験を通してー

本研究の目的は、髪のない女性たちの「日常生活世界」(Shütz and Luckmann 2003=2015)に焦点をあて、フィールドワークの経験を通して、彼女たちの多様な意味世界に接近することにより、「女性に髪があるのは自然であたりまえ」「女性の髪は美しいほうが望ましい」という“常識”を問い直すことにある。本研究で対象としているのは、先天的・後天的な病気（脱毛症、抜毛症）によって、まだら頭やスキンヘッドの女性たちの生きられた経験である。

研究の背景には、女性にとって髪は「ジェンダー・アイデンティのシンボル」(Synnott 1993=1997: 182-3)と捉えられ、女性が髪を失うという経験はタブー視されてきたことがある(Romweber 2004; Weitz 2005; Hoffmann 2006; Riley 2009)。日本においても同様であり(須長 1999)、彼女たちの生きられた経験は社会調査の対象として焦点化されてこなかった。

フィールドワークは、2012年6月から2019年3月にかけて行った。調査の具体的な手法としては、国内で最も長い歴史をもつ当事者の会に、調査者としての身分を事前に伝えたくて、当事者会員として所属し、会の運営組織に協力を得ながら、以下3つの調査を実施した。

第一は、当事者とその家族の生活史の聞き取り調査である。聞き取りは個別インタビュー形式で行い、75名(当事者女性42名、当事者男性17名、当事者家族16名)に協力を得た。聞き取りの場面では、ライフストーリー調査法に依拠しながら(桜井 2002)、ともに当事者である聞き手と語り手が、当事者としてのこれまでの経験を互いに語り合う作業を通して、「曖昧な生きづらさ」(草柳 2004)を言語化するというプロセスが極めて重要となった。調査協力者の多くは、これまで髪の喪失をめぐる経験を他者に語る機会がほとんどなく、発症以降の問題経験を言語化することは、とても難しい作業だったことによる。申請者自身、彼女たちとの語り合いを通して、調査を始めるまで秘匿化し、ながらく言葉にすることのできなかつた発症以降の経験を言語化しうるようになった。このように本研究では、髪のない女性たちの記憶と経験を共有し、「私たちのストーリー」(Plummer 1995=1998)を構築しようと模索していく調査・研究のプロセスに、調査者の当事者性を生かすという手法を採用した。

第二は、当事者の会での参与観察である。調査協力者のなかには、会への参加歴が長く、ボランティアスタッフとして当事者同士のセルフ・ヘルプ(ピア・カウンセリング)活動に携わってきた女性たちや、「実名・顔出し」ができる数少ない当事者として、メディア取材協力や講演活動を行いながら、当事者運動を牽引してきた女性たちも含まれる。したがってフィールドワークでは、彼女たちがどのような活動を行っているのか、活動内容を内部から観察し、フィールドノートに記録した。

第三は、当事者の会の運動史に関する資料収集と内容分析である。本調査フィールドは、国内初の当事者の会として知られ、1996年に発足以降、当事者運動が綿々と受け継がれてきた歴史がある。この点をふまえて、収集した資料の内容分析を行い、運動史を整理した。具体的な資料は、当事者コミュニティの歴史を知る人びと(運営スタッフ、参加歴の長い当事者たち)への聞き取りデータ、当事者の会の出版物(会報、手記集)、ならびにメディア報道資料(テレビの録画ビデオ、新聞・雑誌記事)である。

本論文の構成は、序章から終章までの全7章となっている。各章の概要と得られた知見は、以下のとおりである。

序章では、髪のない女性たちの経験に関する海外の社会学的研究を批判的に検討した。結果、既存研究の知見は、「女性に髪がないこと」をマイナスイメージの記号、すなわち「スティグマのシンボル」(Goffman 1963=2001: 82-3)と自明視することによって、髪のない女性たちの多様性を捨象していると指摘した。申請者のフィールドワークの経験をふまえると、彼女たちの生きられた経験は、既存研究で報告されている

実態の範疇にとどまらず、より多様であったことによる。

第1章では、髪のない女性たちの「生きづらさ」とは何なのか、その具体的内実を検討した。結果、彼女たちの「生きづらさ」とは、「女」アイデンティティの身体記号としての髪がないことによるつらさや悲しみではなく、髪がないことへの対処の過程、すなわち「パッシング」(Goffmann 1963=2001)によって生起する問題経験であることが明らかとなった。それらは日常生活に支障をきたすだけでなく、人生選択やライフコースにも大きな影響を及ぼしていた。また、彼女たちは「生きづらさ」への個人的対処を迫られやすい状況にあることを指摘した。この点をふまえたうえで、第2章から第5章では、「いまはもう生きづらさを感じない」「乗り越えた」と語る女性たちに注目し、それぞれの対処戦略がいかに機能しうるのかを明らかにした。

第2章では、ほとんどの女性が採用していた「ウィッグ生活」という対処戦略について、AさんとBさんの事例をもとに検討した。結果、この対処戦略は、治療の放棄を契機として、髪がないことを「治さなくていいもの」と意味づけ、さらにパッシングを「社会生活を織り成すさまざまな条件のなかで生ずるやもしれない露見や破滅の危険に備えながら、自分が選択した性別で生きていく権利を達成し、それを確保していく作業」(Garfinkel 1967=1987: 246)と捉えることで、「生きづらさ」を軽減/解消しうる方法であることが明らかとなった。

「ウィッグ生活」が当事者コミュニティにおいて支持される背景には、この対処戦略が、女性にとって髪は重要であり、さらに女性は身だしなみやおしゃれに配慮することが「よいこと」とされる「マスター・ナラティブ(ドミナント・ストーリー)」(桜井2002: 36)と親和的であることを指摘した。そのうえで、続く第3章から第5章では、「ウィッグ生活」とは異なる対処戦略に注目し、それぞれを採用している女性たちのライフストーリーをもとに、それらがいかに機能しうるのかを明らかにした。

第3章では、「このゆびとまれ」と声をあげ、当事者の会を立ち上げた初代会長Cさんの事例を検討した。結果、「このゆびとまれ」という対処戦略は、他者/社会からは過小評価されやすい問題経験を当事者コミュニティで共有することで、「生きづらさ」を軽減/解消しえていた。

第4章では、会長として会の運営に携わりながら、啓発活動の場面ではかつらを外し、髪のない姿を「さらす」女性の事例を検討した。結果、「さらす」という対処戦略は、かつらを着用して生活する多くの当事者が、「カミングアウト」に伴う「面倒さ」を伴うことなく、髪がなくかつらを着用していると「さらっと言う」ことができる社会の実現を目指していた。同時にこの対処戦略は、当事者である彼女自身にとってもまた、その「面倒さ」を回避しながら、より快適な「ウィッグ生活」を送ることで、「生きづらさ」を軽減/解消しえていた。

第5章では、副会長として会の運営に携わりながら、かつらを使わずに生活する女性の事例を検討した。結果、「スキンヘッド生活」という対処戦略は、当事者である彼女自身が「生きづらさ」から解放されるだけでなく、パッシングによって生じる問題経験を最小化させ、家庭生活を維持しながら、家族とともに生きることで、「生きづらさ」を軽減/解消しえていた。

終章では、本論文で「ウィッグ生活」「スキンヘッド生活」とよんだ2つの対処戦略を「障害社会学」(榊原編 2019)の視座から比較検討することを通して、パッシングする/しないという異なりだけでなく、両者が併せ持つ共通点を明らかにした。第一は、いずれも「女性に髪がないこと」とパッシングの意味づけを変化させることによって、それに伴う「生きづらさ」を軽減/解消しうることである。第二は、いずれの対処戦略も、「女性に髪があるのは自然であたりまえ」という“常識”のもとで機能しうることである。

以上の知見から、本論文では、髪のない女性たちは女性の髪をめぐる“常識”を相対化したうえで、それぞれの対処戦略を巧みに使いこなしながら、この社会をしなやかに生き抜いていると結論付けた。今後の課題としては、近年、活発化しつつある当事者運動の動向のさらなる検討の必要性を述べた。

## 引用文献

- Garfinkel, H., 1967, “Passing and the Managed Achievement of Sex Status in an ‘Intersexed Person’ Part1 an Abridged Version,” *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall: 116-85.  
(=1987, 「アグネス、彼女はいかにして女になりつづけたか——ある両性の人間の女性としての通過作業とその社会的地位の操作的達成」[抄訳] 山田富秋・好井裕明・山崎敬一編訳『エスノメソドロジ——社会学的思考の解体』せりか書房, 217-95.)

- Goffman, E., 1963, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall, Inc. (= 2001, 石黒毅訳『スティグマの社会学——烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房.)
- Hoffmann, C., 2006, *Breaking the Silence on Women's Hair Loss: A Proactive Guide to Finding Help*, Woodland Publishing.
- 草柳千早, 2004, 『「曖昧な生きづらさ」と社会——クレイム申し立ての社会学』世界思想社.
- Plummer, K., 1995, *Telling Sexual Stories: Power, Change and Social Worlds*, London: Routledge. (=1998, 桜井厚・好井裕明・小林多寿子訳『セクシュアル・ストーリーの時代——語りのポリテクス』新曜社.)
- Riley, C., 2009, “Women, Hair and Identity: The Social Processes of Alopecia,” Supervised by Dt. Kiran Cunningham, Department of Anthropology and Sociology, A paper submitted in partial fulfillment of the requirements for the degree of Bachelor of Arts in Kalamazoo College.
- Romweber, S., 2004, *Hair: Surviving the Fall*, Rainbow Books, Inc.
- 榊原賢二郎編, 2019, 『障害社会学という視座——社会モデルから社会学的反省へ』新曜社.
- 桜井厚, 2002, 『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Schütz, A. and T. Luckmann, 2003, *Strukturen der Lebenswelt*, Konstanz: UVK Verlagsgesellschaft. (=2015, 那須壽監訳『生活世界の構造』筑摩書房.)
- 須長史生, 1999, 『ハゲを生きる——外見と男らしさの社会学』勁草書房.
- Synnott, A., 1993, *The Body Social: Symbolism, Self and Society*, New York: Routledge. (=1997, 高橋勇夫訳『ボディ・ソシアル——身体と感覚の社会学』筑摩書房.)
- Weitz, R., 2005, *Rapunzel's Daughters: What Women's Hair Tells Us About Women's Lives*, New York: Farrar, Straus and Giroux.